

「ホトケドジョウのビオトープと雑木林」 環境省 自然共生サイトに認定されました。

サイト名称：「ホトケドジョウのビオトープと雑木林」

申請者：(学)桐光学園中学高等学校

所在地：川崎市麻生区栗木



2023年10月6日(金)環境省が令和5年度前期「自然共生サイト」の認定サイトを発表しました

<https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/kyousei/nintei/index.html>

私たち桐光学園は、多摩丘陵の豊かな自然の中で、1978年に開校しました。当時は山の中にポツンと校舎だけがある状態でしたが、昭和・平成と開発が進み自然環境は大きく変わってきました。特に、1987年から始まったマイコンシティの建設は、当時の生物部の生徒たちにとって大きな出来事であり、栗木地区の自然環境の記録を残そうと積極的に活動していた時期でもあります。

桐光学園は、多摩丘陵の山々とその間のいくつかの谷戸に囲まれていました。開発された学園の北側の地域には、大森谷戸と畑谷戸がありました。大森谷戸には細流・田んぼがあり、絶滅危惧種のホトケドジョウの生育場所でもありました。開発によりホトケドジョウはいなくなり、細流が流れ込んでいた片平川(常念寺～桐光学園の間)も現在では暗渠となってしまっています。

現在までに多くの生育場所が、開発により失われてきました。

2004年桐光学園は、ホトケドジョウの保護と繁殖のためのビオトープを作ります。谷戸の細流をイメージした小川と池からなるビオトープは、地下水をくみ上げ、冷水域の環境を再現しています。今年で19年目を迎えたビオトープでは、毎年たくさんの稚魚がふ化しています。

学校敷地内南に残る多摩丘陵の雑木林では、以前と同じような貴重な植物が残っています。

現在では、ほとんど見られなくなってしまった絶滅危惧種の多くを、この場所で観察することができます。

クヌギ・コナラの雑木林から、シラカシなどの陰樹林への遷移の途中の森では、近年のナラ枯れなど森の生態系の変化が心配されますが、以前からある貴重種は、数を増やしつつあります。

ホトケドジョウのビオトープ

2004 年学園の北側に作られた、絶滅危惧種ホトケドジョウの保護繁殖の為のビオトープです。多摩丘陵の生息地の谷戸や山の細流をイメージした小川と池からなるビオトープは、地下水をくみ上げ、冷水域の環境を作り出しています。学園の北側にかつてあった大森谷戸のホトケドジョウの生息域を再び蘇らせたものです。毎年、多くの稚魚が孵化し、たくさんの成魚を観察することができます。



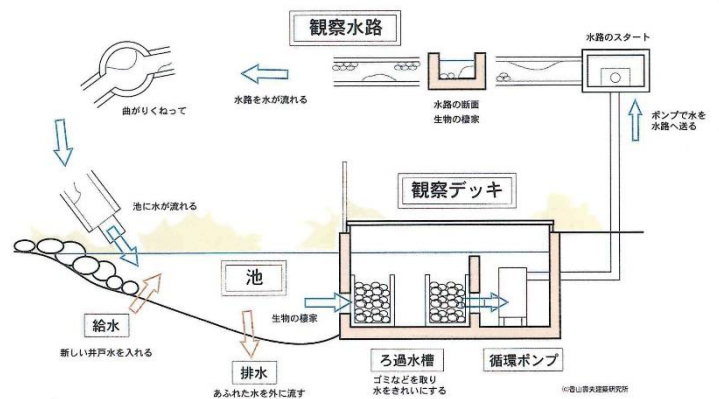
2004 年 3 月 ビオトープ完成



2022 年 7 月 ビオトープ掃除風景



毎年多くの稚魚が生まれています。



ビオトープの循環システム

雑木林

学園の南・東側には、かつての多摩丘陵で見られた雑木林が現在も保存されています。他の地区ではほとんど見られなくなったいくつもの絶滅危惧種の多くを見ることができる貴重な場所です。

学園のある川崎市麻生区栗木は、多摩丘陵の中のいくつかの谷戸が交差する複雑な地形の場所でした。雑木林は、ホトケドジョウが観察された谷戸（大森谷戸）の南側にあります。

現在の雑木林は、クヌギ・コナラの陽樹林からシラカシなどの陰樹林が混ざる混交林に変わりつつあります。ナラ枯れを起こす樹木も見られ、森の生態系の変化が心配されますが、幸いなことに森林内の絶滅危惧種は毎年増えつつあります。

江戸時代頃にこの地区で発見された最初の甘柿である禅寺丸柿は、栽培が盛んになり江戸東京野菜の1つになっています。現在では出荷されることはなくなりましたが、雑木林や谷戸の周りでは多くの柿の木が、秋になると小さな赤い実をたくさんつけています。学園内にも当時から生えている大きな柿の木が数本残されています。

雑木林にはコナラを食草とするゼフィルス類（ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミなど）が生育しています。哺乳類ではタヌキの他、ハクビシン、アライグマなどが、落ち葉の堆積地でカブトムシの幼虫を探す姿を度々見かけます。

その生態からほとんど姿を確認できない、ジムグリ（爬虫類ヘビ）も今年観察することができました。



雑木林



禅寺丸柿（敷地内テニスコート横）



タヌキ



ジムグリ